

私は本日の講義で加藤さんが言われた、「少数派がまちを変える」という言葉が印象にのこりました。私たち学生は地域創生学群にはいり、たくさんの取り組みや活動をさせていただいています、その中でいつも対象の人を大人数の人にして取り組みを行ってしまうため思うような成果がでず悩むことが多々あります、本日の話を聞いてまずは近くの人や周りの人から動かしてみる影響させてみるということを私のこれからの活動の心においておこうと思いました。

本日の特別講義で「少数派がまちを変える」という言葉が印象的でした。「みんなのために」はあくまでもゴール、そのプロセスとして少数派の意見に耳を傾けるということを知り非常に納得しました。これまでは少数派より多数派を優先した方が事業も進めやすいし、精神的にも安心感が得られると思っていました。さらに、私も大人数のチームで活動するとき嫌われたくない、「関係を良好に保ちたい」という気持ちが強すぎて少数派への意識が全くありませんでした。しかし、それでは何も変わらないし変わっていないからこそ今の地域衰退の現状があるのだと痛感しました。改めて加藤さんに具体例を踏まえて「少数派がまちを変える」ということを聞いて、自分も変わらなければならないと感じました。

印象に残ったのは、ムーブメントは多数から始まらないという言葉です。これまでの人口が増え続けてきた日本では、何をしても人が増えているから人が集まりやすく「みんなと同じ」、「みんなのために」が重視されるけど、これからの人口が減り続ける日本では「多様性」「特有の価値」が重視されるという話では、現代の音楽市場に照らし合わせてみると分かりやすいと思いました。大衆ウケを狙った曲よりも、マニアックで少数の人にウケそうな曲こそ、熱狂的なファンによって自然と広まって、最終的に爆発的な人気を出す感覚を感じていたので、その通りだと思いました。これを FM 実習で訪問する校区に置き換えて考えても同じで、市民センターを積極的に利用して活動や住民同士の交流を楽しもうとしている人の意見をもっと聞きいて共により良い場を作っていくことが大切だと思いました。それによって、さらに友人に市民センターの存在や活動を広めたいような場になり、市民センターを利用する人が増えるという流れが最も現実的で、今私たちが1番すべきことなんだと胸に落ちました。館長さんとも、市民センターに来ていない人にどうすれば来てくれるのかと度々話題になるので、この内容、そして論語の「近き者悦び、遠き者来る」という言葉も交えて館長さんに共有してみたいと思います。

私が今回加藤さんの講義を聴いて学びになったことが二つあります。

一つ目は学生時代の体験から疑問点を見出していることです。加藤さんが講義の序盤で述べられていた「今は都心が一番いいという傾向になっている地域が多いけれど、本当にそれでいいのかと疑問に思った」という言葉を聴いて私は、はっとしました。なぜなら自分が加藤さんの述べられていた『今』に当たる人だからです。私の地元である佐賀県唐津市中でも私の住んでいた浜玉町は糸島市の隣にあり、また天神・博多の都心まで車やバス・電車を使って1時間弱程で行けることから仕事に行くにも、遊びに行くのも多くは都心に出るという人がとても多い地域でした。だからこそ私も小学生の頃からなんでもある都心はいいなと羨んでいたし、暮らすなら絶対福岡の方がいいと感じたりしていました。このような「何でも揃っていて便利であればそれに越したことはない」という考えにより私は都心が1番という考えに疑問を持ったことはありませんでした。しかし、今回の加藤さんの話を聞いてその考えは変わりました。なぜなら大学進学とともに地元を少し離れてこの北九州の小倉という都心で暮らすようになって初めて不便で完全に充足していないことの良さに気づいたらからです。確かに地元の電車は下手すると1時間に一本しか来ないけど、その分時間の管理をしっかりしていたし、乗り遅れたら諦めて友達とずっと話しながら帰り、とても楽しかったという不便だけど確実に充実した日常はあったなということを思い出しました。私もこのような実感を持っているのならこれからはそれを都心一極化ということに対して疑問を持てるはずなのでしっかり考えられるようになりたいと思います。

二つ目は社会がどのようにして動くのかということです。講義終盤で動画と加藤さんのまとめで挙げられていた「リーダーは課題評価されている、しかしもっと評価していいのはそのフォローをする人だ」ということに私は救われました。私自身、1人で動き出せるような人ではなく、どちらかというとリーダーのように率先して発言したり、行動したりする人をサポートする方が向いていると思っています。しかし、地域創生学群に入学すると、発言や行動が多くの人を惹きつけられる人などが多くいて、それが苦手な私は少し追い目を感じていました。しかし、フォローする側も評価されるべきだということを知り、自分のようなタイプの者も必要なんだと分かり自分に自信が持てたと思います。これらのことから私は最初に動き出している人を見つけ出してあげられる存在になり、その人を支えてあげたいと思います。そのために視野を広げて周囲を見渡せるようになりたいです。また初めに動き出している人全てが正しいというわけでもないと思うため、しっかり見極められる観察力も身につけていきたいと考えました。

長くなりましたが、最後に一言述べさせていただきます。加藤さんはとても客観的に分析して行動に移せる人だと感じました。そして大半の人が見落としているような少数に目を向けられていることはとても素晴らしいと思いましたし、私も見習いたいと思いました。今回の講義とても充実していて、私もとても学びになりました。ありがとうございました。

私は今まで地元を盛り上げたい。盛り上げるためには観光客を増やそう。じゃあ観光客が来るためには、と観光客中心で考えていました。そして観光客が増えれば地元の人も自分の地域を胸張ってオススメできるだろうとも考えていました。しかし加藤先生が観光客だらけのお店より、地元の人がゆっくりしているお店に行きたいとおっしゃったとき「私も」と思い、何も外部から盛り上げるだけではないと気づきました。まずは地元の人が町を楽しめるように楽しんでいる人(少数)から意見を聞く。そして段々とフォロワー(共感者)を増やしていき、友人を連れてきたくなるような町や雰囲気創造していきたいと思いました。

また、質問なのですが町を楽しんでいる人といった少数の人たちはどのように見つけるのでしょうか。動画のように1人で踊りだしたりしたら見つけやすいとは思いますが、そんな人はめったにいないと思うので教えてください。できれば幸いです。

(少数から意見を聞く。と書いておきながらこのような質問をすまません)

今日加藤寛之さんの講話を聴いて、「少数派がまちを変える」ということが一番印象に残りました。その理由はまちの元気がないのは大多数がまちに興味がないからでありその多数派の意見を聞くのではなく少数派の意見を聞き、その少数派が先陣を切って進むことでまちは活気づくということにとっても納得できたからです。今まで自分自身や人間は多数派の集団に属していたという心理によって現状の何かを変えたいと思っていたとしても周囲の目などを気にしてなかなか行動に移すのが難しかったと思います。しかし加藤さんもおっしゃられていたように多数派には変化がないため未来がありません。一方で少数派は最初は孤独であるかもしれませんが徐々にファンがファンを呼びやがて大きな集団となって未来を切り開いていくことができます。また、人間は抽象的なことには興味を示さず具体的であるほど自分事としてとらえることができるようになるということは実習活動などで活かせると考えました。今まではより多くの人のためにと考えてしまっているため抽象的な内容になってしまうということがあります。そこでお話の中にもあったように、誰に何をどうやってと絞り込んで一歩ずつ進んでいき結果としてみんなのためとなるように企画を今後の実習活動で行っていきたいと思いました。

加藤さんの「ご近所を素敵に変えよう」というスローガンが堅苦しくなくて、イメージがしやすいものでとてもいいなと思いました。私は自分の生まれ育った地域が大好きです。素敵な伝統文化や食べ物、地域の空気感、人の温かさ、全部が好きだし、大学に来て他県の人と交流することが増えた今、なおさら地域の魅力を感じるしみんなが私の地元を「いいよね」と言ってくれます。加藤さんはお話の中で、みんな東京がいいと思っているみたいな空気感に違和感を覚えたとおっしゃっていました。私は、周りのみんなが私の地元をいいと言ってくれることに違和感というかそうじゃないんだよなと思うことがたまにあります。他の地域もそうだと思うけれど、私の地元には観光客や地域の外にいる人には見えない問題があります。地域魅力度ランキングでも上位に上がる県ですが、みんなが私の地元をいいと思ってくれて嬉しいのと同時に、実際はそうじゃないんだよなと思うギャップがあって、うまく言葉が見つからないけれど、地域の内にいる地元の人が悩んでいる問題があるのに、外の人には良く映っている地域って、なんかだましているみたいでとても違和感に思います。加藤さんが社会を動かすには、みんなのゴールのために少数が先頭を切って新しいことにチャレンジしないとイケないとおっしゃっていました。私の地元にある問題も社会が動かなきゃ解決しないものばかりだから、私とその少数になって地元を真正銘の魅力的な地域にするためにこの大学生活の中でいろんな知識を増やして、小さなことでも新しいことにチャレンジしていろんな経験をしたいです。そして、みんなから地元を褒めてもらった時に純粋にうれしいと思えるようにしたいです。

私は地元の人が友人を連れてきたくなるような場所づくりという考えにとっても共感を覚えました。私の地元は東京で東京という地域に誇りを持つことはありません。東京は確かに何でも揃うし、不便なところはほぼありませんしかし、誇れるところ言うと何一つ思い浮かばないのが現状です。そのためそういった地域に地元の人が友人を連れていきたくするような場所を作ることがまちをかえていくことにつながるのかなと思いました。

また、素敵なお近所に変えようというのも気に入りました。私は高校2年生の頃地域未来留学365をつかい地方の暮らしを体験してみたいと思った理由が地方の住民同士の盛んな関係を身近で味わってみたいと思い留学しました。そのため私はご近所付き合いなどの地域間の交流は大切だと考えているので、本日の講話がとても素敵に感じました。

特に印象に残っているのは、sartoのビジョンとして加藤さんがおっしゃっていた「地域の魅力を繋げて仕立てて提供する」というフレーズです。「繋げる」、「仕立てる」、「提供する」という言葉を聞いて、私の目指すまちづくりはまさにこれだと思いました。

素材をそのままではなくどう活かしていくかが自分たちの腕の見せ所で、個々の魅力によって活かし方は工夫する必要があるし、どうまちに落とし込むかは地域を変えたい人々で考えていかなければいけないんだと改めて感じました。

また、「常に今を追って、先を想像していかなければ未来に通用するまちづくりは行えない」ということを学びました。今を生きている人々に響く事業展開をしており、まちを変えている実践者である加藤さんの姿を目の当たりにして、自分には社会の現状を追ったり、分析したりする量・質が全く足りていないと感じました。現状を的確に捉えるなら、過去を把握していないと難しいし、未来をイメージするには過去と今の土台が必要不可欠であることにはとさせられました。何をすっ飛ばして未来のまちづくりに携わろうとしているのだろうかと思い、北九州市の歴史や現状の把握、社会の動向などを着実に追っていかうと思いました。そして、そういった、過去、現在、未来に思いを馳せる人は柔軟な思考ができる人だと考えます。私もそんな社会人になりたい、そしてもしも柔軟な思考ができず新たなチャレンジに踏み出せない大人に老いてしまったら自分ではなく柔軟に物事を考え、それを実践できる人には頼んだと深く任せたり、一緒に取組ませてもらうことでそこから学べたりする人でありたいと思いました。

さらに、「社会はどうやって動き出すのか」という話を聞いて、「初めは少数からムーブメントが始まる。プロセスで人々を巻き込み、ゴールをみんなのために設定すればいい。」という気づきを得られました。今までは、まちづくりを行うときには、できるだけ多くの人の意見を聞いてなんとか合意形成をする必要がある、だけどそんなことが本当に可能なのかと疑問に思っていました。しかし、みんなのためというゴールに向かって、初めは少数で合意形成をして、その後に関わってくれる人が提案する要素などを加えていくやり方もいいのかもしれないという考えになりました。納得できるまちづくりの進め方はまだ研究しきれていないので今後も考えていきたいと思います。

素敵な事業の内容だけでなく、加藤さんの考え方や話し方などから書かせていただいた以上の学びを得ることができました。ありがとうございました！

今回加藤さんの講義を聞いて、「少数派がまちを変える」という言葉に衝撃を受けました。中学や高校で何か企画をする際、「全体の八割が賛成する案を考えろ」と大多数基準で教えられてきたので、今までとは全く反対の考えに驚くと同時に、話を聞いて納得もしました。

超少子高齢社会を迎え人口が急速に減少し、これからの当たり前が今までの当たり前から180度変わっていく。そんな社会を生きる私たちに必要な考え方は、少数を弾圧し今までの常識を推し進めるのではなく、前例を踏襲する姿勢を再度見直し、疑問を持ち、個々の多様性をいかに活かしていくかを考えていくことが大切であると学びました。

今回の特別講義を受けて、講師の方は1歩先ではなく0.5歩先を歩まれているなと思いました。ほかの人とは違う考えだがその街にしっかりと寄り添っていて、有効な案を生み出されているように感じました。

私が今回の講義で印象に残ったことは、加藤さんの着眼点とそれを見逃さない力の凄さだと感じました。私であれば、東京などの都会に人が流れることは、当たり前のことだと思って何も感じませんが、加藤さんはそこに疑問を持ち、それをまちづくりビジネスとして活用してるところが何よりすごいと感じました。さらに、地元の人に愛される店を作る、という点では、今までの常識がひっくり返りました。そして、他県や外国人をターゲットにしたマネジメントに抱いていた疑問の正体がこのことだとわかりました。現在旦過市場の火災の後、観光客をターゲットにしているであろうものがたくさんありますが、個人的には、それは旦過市場本来の良さを失ってしまっていると感じますし、さほど北九州に観光客を取り入れる力になっていないと感じることに納得がいききました。

一番印象に残ったことは、少数派の意見がまちをかえるというお話です。加藤さんはさびれた商店街のことを例にあげてお話していましたが、多数の人はまちを楽しんでいない、少数でも楽しみたいという人の意見を聞くことというのは驚きでしたが、納得しました。高校の時地元で有名な市場のフードロスを減らすために活動した際には、実際にその市場を利用している人だけでなく、市街に住んでいるが気になっている人などにもアンケートを行いました。そこで感じたのは、少数でも出てきた意見や案は的を得ているものも多く無視できないということでした。今回、加藤さんのお話では少数派でもやる気のある人を応援するといった趣旨も含んでいるのではないかと感じました。

加藤さんのお話で外の地域の友達が来たくなるようにする前に地元の人が愛してくれる店にするという話が印象に残った。私は将来観光で地元の町おこしをしたいと思っているけれども、そもそもそこに住んでいる人がその地域を愛していないと継続しないと思うのでとても大事だと思う。また、町の未来を見据えて自分の街を楽しんでいる人の意見を大切にすべきというのは私

<p>も共感した。街を楽しめるのはその町に興味を持っていて、街の住民の一員という自覚があるということなので、そのような人の意見を聞くことで、本当に街を知っている人のその町に本当に必要な部分を見つけ出すことができると感じた。</p>
<p>今日の講義で最も印象に残ったことは、ファンがファンを作ることです。ファンになってくれた人が、企画側が気づけないようなことを感じたまま熱意をもって伝えてくれることで、私たちが宣伝をするよりもより顧客目線に立った情報を知ってもらえるということを学ぶことができました。また、最近は SNS での宣伝が増えている中で、お金が発生せずとも直接良さを伝えてくれる人がいるというのは、企画側にとって目には見えない大きな利益だと思いました。私の実習であるキッズトレーニング実習でも、去年来てくれていた子の妹さんや弟さんがたくさん来てくれていて、去年先輩方が開いた教室が子どもたちにとってはもちろん、親御さんたちにとっても参加するメリットが大きく、個人から家族という一つの塊へと変化していき、全体の参加者数が大幅に増えました。今年も子どもたちが楽しみながら運動能力を向上できるような企画を練って、北九大キッズトレーニング実習のファンになってもらい、来年の参加者数を増やすという好循環を生み出せるきっかけになりたいです。</p>
<p>まちを面白がっている人がまちを変えるという言葉が印象に残った。これからは少数がまちを変える時代になり、少数派を大切にすることが大切であると知った。今までは人が沢山いて店を出せば売れるがこれからはそうでなく、少子高齢化の当たり前の新常識が生まれると分かった。少数のファンを作りファンを大切にすることも大切だということもわかった。これからは少数派の意見を大切に、人に流されず自分の意見を発してその自分の意見を大切にして、ゴールがみんなのためになるだけで、最初は少数のファンを大切にすることを大事にしていきたいと思った。</p>
<p>buy local という言葉が印象に残りました。外から人を読んだり、お金を落としてもらおうとしているが、住んでいる人の理解が中ではそれを可能にすることは難しい。だからこそ、地域が自分のしたいことややりたいことをできるような空気づくり、環境づくりをする。それによって外から見て賑わっている、活発な地域にみられる。そんな自分にはなかった考え方を知ることができました。</p>
<p>私が加藤さんの特別講義で印象に残ったことは、人の気持ち考え方はすぐ変わるという内容です。高校時代に地域で活動する際に、住民の方と意見が対立してしまうことが有り、なぜそのような意見や考え方をってしまうのだろうと疑問に感じることもありましたが、加藤さんの話を聞いて、歳をとるにつれて人の考え方や意識は変わってしまうのだと分かりました。私自身が当たり前だと感じている考え方は、1年後の私にとって邪道な考え方になってしまうのではと感じました。これからの経験を通して、より洗練された考えができるようになっていきたいですが、逆に今だからこそできる考え方や意識もあると思うのでそれらを大切にしてこれから活動していきたいと感じました。</p>
<p>私は今回の講話で印象に残ったことは、「地元の人が良いと思うものを作らないと人はやってこない」という言葉です。私は個性的なものが人々のインパクトにも残し、起業するには良いのかなと思っていました。しかし、個性的なものや時代に合わせたものを作ったとしても飽きが生まれてしまうことも多くあると思います。ですが、地元の人が良いと思ったものを作ることで飽きも生まれずに地元の人に愛されるお店になると思いました。また、地元の人に愛されることによって地元に戻る理由にもなるのかもしれないと考えました。しかし、地元の人と言っても幅広い年代がいるので、どの層をターゲットにするのか見極めるのを気を付けなければいけないと思いました。</p>
<p>今回の講話で私が印象に残ったのは、自治体や地域のやり方に当てはめず、自分のやり方で事業を展開すると言った内容でした。この内容を聞いて少し自分の中で困惑しました。</p> <p>指導的実習の時に「地域に土足で入らず、地域に溶け込む」と言った内容を教わりました。なので市民センターでの活動も地域のニーズを軸に活動してきました。ですが今回、自分のやりたいように活動していると発言されていて私の中の活動理念と衝突しました。</p> <p>私なりに考えた答えは小さいコミュニティではその地域のニーズを重んじ、街の中では時に自分のやり方で開拓していく事も大事なのではないかと言う考えに至りました。柔軟な活動を心がけたいです。</p>
<p>私が講義の中で印象に残ったことは主に 2 つあります。</p> <p>1 つ目は「上司の言うことに違和感を感じた時はその違和感を手放さずに持ち続けて良い」という加藤さんの言葉です。高校までは「先生からこう教えていただいたから、きっとこれが正解だから教えてもらった通りにしなきゃ」と正解を教えてもらっている立場だという認識が強くありました。そのため、時々抱いていた違和感を「先生たちの言っていることの方が正しいだろう」と自分で決めつけ、目を逸らしていました。</p> <p>常に変化していく時代の流れに沿ったまちづくりをするには自分の違和感も大切にして良いのだと気づくことができました。</p>

私は加藤寛之さんの講義を受けて、自分の違和感を大事にされているところが以前の竹馬さんのお話と共通しているなと感じました。先頭に立って新しいものを生み出していく方々の共通点を発見し、改めて違和感を抱く重要さを感じました。私は日常の中で違和感を抱く機会が少ないなと講義を受けながら考えていました。加藤さんのように当たり前を当たり前として流しちゃうことなく、当たり前を疑えるような客観的な視点で物事を捉えることを日々意識して違和感をキャッチする練習をします。2つ目は、「まちづくりは皆の意見を聞かなくていい」という言葉です。私はこの言葉を聞いた時、驚きのあまり「えっ」と声を漏らしてしまいました。

私は外ウケではなく地域の人に愛されるまちづくりを行うならば地域で多くの人が求めるニーズにしっかりと応えることが必要だと思い込んでいました。

しかし、加藤さんはまちを楽しんでいる、今まちにあるものの中から面白さを見つけられる、まちの明るい未来を想像できている人の声に耳を傾けるべきだとおっしゃっていました。まちを楽しんでいる人と仕事を進めていくことで、こちら側もワクワクしてきて、よりパフォーマンスが上がるのだらうなと思いました。

「ゴールにたどり着いて初めてまちづくりがみんなのためになる」この教えも心に留めておきます。

貴重なお話をありがとうございました。

今回の学びを自分の中に落とし込み、これからの地域活動に生かしていきます。

私が今回の講義で印象に残ったのは、「地元の人が愛してやまない店を作る」ということである。まちづくりの取り組みを行い、人を増やそうとする際に、どうしても観光客や新たな客を集めようとするがまずは、地元の人から愛されるという視点で考えることが大切だと知った。地元の人が紹介したくなるような店であることで自然と周りから来た客も集まるようになる。自分自身も今後まちづくりの取り組みを行う上で、まずは地元の人のことを考え、街を面白がっている人の話を聞き、地元の人から愛されるまちを作っていきたい。

加藤裕之さんの講義を受けて印象に残ったことは二つある。一つはまちづくりの考え方の一つとして「少数派が街を変える」とおっしゃられていたが私はよく意味がわからなかった。しかしその後の街の楽しさが分からない人からアンケートをとるより街の楽しさを知っている人からアンケートをとったほうが効果的、またファンでもない普通の人からアンケートをとるよりファンからアンケートをとったほうがファンが増える話を聞いて感銘を受けた。二つ目は講義の最後の方でみた1人のバカからムーブメントは始まる動画を見てとてもわかりやすく印象に残った。ので自分も何か行動に起こす時はその行動に乗ってくれる2人目がくるまでアピールし続けようと思う。

人口減少やローカル感、少数派は都市計画において障害になると考えてしまいがちでしたが加藤さんの講義を通してこれらはむしろ活用していくべきものだということが分かりました。なんでも新しく作り最新に変えていくことに執着するのではなく、今あるものをどのように生かしていくかという考え方を優先したいです。また、少数派を大切にファンを作るということは片岡先生の講義でも取り上げられていたので改めて重要さを感じました。少数派にフォーカスしながらもゴールはみんなのためという言葉が印象に残りました。最近、私の地元では数年前のように地域イベントが開催されず近所の人と顔を合わせる機会はほとんどありません。加藤さんはご近所の良好な人間関係が幸福度を高くしておっしゃっていたので、昔のようにイベントや行事を楽しみたい人にフォーカスしてそれが地域全体の幸福度が上がるようにつなげられたらと思いました。

私は今回の講義の中で、「近きもの説き、遠きもの来る」という言葉が印象に残りました。現代を生きていく中で就職の時や遊びに行くとなったときになんとなく都心に行くといった傾向があります。自分の地元でも大学がなかったり、就職先が少なかったり、遊びに行く場所が固定化されているという現状から地元から離れた場所へ行く人が多く、人口減少の一つの原因にもなっています。その状況を改善するための方法として、今回の講義の中で加藤さんがおっしゃっていた、まずは地元の人が友人を連れてきたくなるようなお店を開くべきであるという言葉に関心を持ちました。私はいつも地元の人口減少をとどめる方法として移住政策などといった市外の人に向けた方法に目を向けがちでした。しかし、地域の魅力を高めるためには、まずは地元の人に気に入ってもらえてリピートしてもらえるようなお店を開くことも重要なのだと気づくことが出来ました。そして、市外の人にも紹介してもらえるような場所をつくることで地元の魅力発信のきっかけにもなると感じました。また、見つけた建物を使って事業を行う際にその建物を残すのではなく壊して利用するという考え方も新鮮でした。地元の商店街もシャッター街になっているのですが、これまで私はいかに建物を利用して事業を行うかということばかり考えていました。しかし、一度壊して新たな場所を1から生み出すことでより新しいものを創出できるのだと感じました。このように、地域の魅力を高めるためには既存の方法を利用

<p>するのではなくチャレンジすることが大切なのだと改めて学びました。自分の中の固定された考え方にとらわれないように今後も地域創生と向き合っていきたいです。</p>
<p>今回の講義の中で一番印象に残ったのは「地元の人が愛してやまない店にしよう」という言葉です。理由は加藤さんがおっしゃっていた、旅行した時は、地元の人が並んでいるお店に行きたいという考え方に深く共感できたからです。地域の活性化を考えるうえで今まで考えたことがない視点だったのですごく面白かったです。また、地元の人から愛されているお店は閉店する際にも惜しまれていることが多く、テレビなどに取り上げられているのをよく目にするので、それをきっかけにお店を知ることができると思いました。</p>
<p>今回の講義を受けて印象に残ったことが二つあります。</p> <p>一つは、地域を盛り上げるための心理はどこにあるのか、それは地元の住民であることだ。とおっしゃっていたことです。この言葉を聞いて、はっ、とされました。その通りだと思いました。私の地元では地域を盛り上げるために毎年、地域サミットを開催し、未来の地域について考える会があります。そこでは、外の人に地域を見てもらうためにはどうしたらいいのか、パンフレットやSNSの運用などたくさん案が出てきましたが、正直なところ、どれも大きな成果を得られているわけではありません。その会ではその地域の良さをみんなで認識していません。みんなですべて住みよい街づくりをしていくことを大切にすべきだと、この話を聞いて思いました。まずそれをすることで、その住民の住みやすさに、雰囲気、情景に外の人たちが目を向けるのではないかと思います。それをパンフレットやSNSに発信することで、本当の地域の良さが伝わるのではないかなと思います。</p> <p>二つ目は、少数派が街を変えるということです。以前の授業でも少数派の意見を大切にすることは習いましたが、みんなの意見は聞かないほうがいいという言葉に驚きました。どこかでみんなの意見を聞いてこそ成り立つものだと思っていました。が、身銭を切り、少数で自分の意見を発信していく人の言葉にも耳を傾けていきたいと思いました。私はその人の勇気もすごいと思います。今までの概念を覆されたお言葉でした。中高と多数決で多いほうで決まり、という考えはビジネスにとってうまくいかないことを理解しました。</p>
<p>今回の講義を聞いて学んだことは、地域活性化をするには地域を楽しんでいる人に話を聞く必要があるということです。地域を楽しめていない多数の意見を聞いて、そのことを改善しようとしてもついてきてくれる人がいないので、楽しみを自分で見つけられる人と一緒に活動したらファンがファンを呼んで活動が大きくなっていくということが分かりました。今後活動するときは、自分から楽しみを見つけて積極的に活動していきたいです。</p>
<p>私が今回の授業の中で一番、印象的だった言葉は、身銭を切っている人に、ついていくべきだ。身銭を切っている人が街を変える時代だという言葉だ。なぜ、印象的だったかというと、実際、地域のために身銭を切れるかと言われたら、切れない大人がほとんどだと思ったからだ。私も今のままでは、きれいなと思う。しかし、どんどん授業を聞いていく中で、興味深い話が多くあって、身銭を切ってもいいなと思った。この授業の話は、ほんの一部に過ぎないと思うが、もっとたくさんお話を聞きたい、学びたいと思った。</p>
<p>今回の加藤さんの講義を聞いて、都市計画化に向けて、未来の都市の暮らしをどう考えるのかということについてすごく深く考えているんだと感じました。21世紀の都市計画として、都市の価値を再確認し、どのような都市にしたいかを明確的に考え、都市と農村を共同させ、都市の高層化を行うことが大切になるということを知りました。そういったことにも少人数の意見が重要になっており、大人数だと意見を聞いていない人が多く見られる。聞く必要があるのは課題をもろともせず、町の未来を見据えて自分の街を楽しんでいる人の意見を少数の身銭を切っている人が上の可能性が高いことが分かりました。</p>
<p>自分の中で1番心に残ったのは少数からムーブメントが始まるということです。今まで多くの人が気に入ったものが流行っていて流行ると思っていました。しかし、それのほとんどは大多数ではなくしょうすうのファンから出来ていることに気づき学んだことです。まちづくりをするに当たって地元の人が友人を連れてきたくなる場所という目標にとってもいいなと思いました。多くの人の観光に行く場所を選ぶ際に、そこに住んでいる友人がいたらその人におすすめの場所を聞くと思います。それにより観光客もよべ、地元の人に愛されると常連客もでき活気も出ると思います。そんな先まで見据えて考えている加藤さんの講義が凄く面白く、学ぶことが多くあったので活かしてこれから地創の活動に挑んでいきます。</p>
<p>加藤さんの講義をお聞きして人生いろんな生き方があるなど改めて実感しました。加藤さんが話していて一番印象に残った事は(社会はどう動かすのだろう。ムーブメントは多数から始まらない)です。最初は何を言っているのだろうと不思議だと思ったが今見えているのは大人数では見えない。確かにfm実習でも少人数で話し合いをする方が沢山の案がでて少人数が未来を変えられると思えました。一握りが少人数の力でした。</p>

加藤さんの話を聞いて価値観が変わった。印象に残ったことが3つある。1つ目は、これまでと、逆に物事を考える。これまでとこれからで人口のグラフが180度変わるから。これまでは都市一極集中だったが、これからは分散でローカルな地方のほうが良いということだ。言うてことは単純だが、なるほど！と思った。2つ目は、身銭を切って動ける人が本当に信頼できる人だということだ。3つ目は、インターネットで買える店、観光客が多い店には観光客もいかないし、なおさら地元客はこないということに、大きく共感した。確かに自分も旅行に行ったら地元の居酒屋とかに行って地域の人と交流したりするのが楽しいのに、観光地を作るのが、観光地を残していくのが正解だと思っていた。

観光客ばかりにではなく、地元の人に愛される地元のお店を開くことにすごくこだわりを持ってらっしゃる方でとても面白い話をたくさん聞くことが出来てよかったです。また、街を面白がっている人に話を聞くと言う点が印象的でした。

今回の講義では、特別ゲストの加藤さんが来てくださり、お話を聞かせてくださいました。特に印象に残ったのは、ご近所の良好な人間関係というお話の部分です。ヒトの幸せを築くうえでの基礎であるという部分にすごく共感しました。「密度×多様性＝接近性」という言葉もすごく好きです。また、「少数派がまちを変える」というお話も学びがありました。みんなの意見を聞きがちではあるけど、まちに元気がなくて、その中でも、楽しんでいない人の意見を聞くのは必要性が少ないんだなということを知れて、本当に必要な意見を大切にしていけるんだなと思いました。なので、少数派の意見を大切にしてみる考えを忘れずに実習で活かしていけたらいいなと思います。「ご近所を素敵に変えよう」という取り組みにも興味があるので、機会があったら大阪に行ってみたいなと思いました。

話の冒頭であった、「周りが東京を目指していることに違和感」という部分に共感した。私の周りにも、「東京に住みたい」とか「就職するなら東京」と言っている子たちがいて、自然がないと生きていけない私からしたら違和感というより価値観そのものが違うんだと思ったことを思い出した。加藤さんのお話ではその土地の良さを残すことに関するお話が多くでてきていたが、建物を取り壊そうとする人たちなど、やはり様々なトラブルの中事業を進められているのだと思った。今回の話の中で、私が一番感じたことは、自分の力量を信じ切る強さと、信じられるほどの経験、これが一番大切にしないといけないことなのではないかと感じた。加藤さんが自分の経歴を自信をもって話せるのはこの二つができてからだと思うし、私もそんな大人になりたい。

私は今までたくさんの意見を尊重し、取り入れていくことが大事だという固定観念があったけど今回の講義を受け、みんなの意見を聞かない、少数派がまちを変えるという言葉が印象に残っています。たしかに全員の意見を全員が納得するように入れるのは難しいと思います。普通の考えの逆をいく面白さを感じ、新しい発見がありました。以前の片岡先生の授業内容と似ているところがありましたが、どうすればまちにお金を使う人が増えるんだろうと考えたけど中々答えが見つからない中、この講義で Buy local のイベントを知り、可能性ややり方は無限にあるなと改めて感じました。

全国を観光地化し、インバウンドの旅行客にむけた様々な取り組みが行われている中で、これまで自分はそれを悪いことだと思っておらず、経済を循環させるために進めるべきだと考えていたが、いざ自分のまちがそうなったら考えると息苦しさを感ずるのではないかと感じた。

加藤さんがおっしゃっていたように地元の人に愛される店は観光客などだけから見ても魅力的に見えるし、人口減少社会の中で多様化が浸透してきている中で、自分の暮らしている町のストリートが活き活きとして温度感がありそれが日常であるという様子を想像したとき、自分にとってもとても魅力的だし、その町に住んでいることを周囲に自慢したくなるなと感じた。また、大多数の無関心な人に意見を聞いても活性化には繋がらないため、全委員の意見を聞こうとするのではなくどんな街にしたいかを考えられる少数派とまちづくりを進めたほうが良いという考えは自分にはなかったもので、確かにそうかもしれないなと感じた。

加藤さんのお話を聞いて、地域を変えるには新しくチャレンジすることが重要であると改めて感じました。まちの人の意見を聞くときも大勢に聞くのではなく、少ない人数だとしてもそのまちを愛している人たちに意見を求め、よりよくしていくことが求められるのだと学びました。

私は、加藤さんの特別講義を聞き、これまでの課題ありきからこれからの未来ありきというお話が特に印象に残りました。これを聞き、今私は市民センターで課題は何なのか、なにが、本質的な課題なのかに着目しているが、その考え方にとらわれ、何をやりたいのかが出てこなくなっていました。というのも、私の行っている市民センターは他の進捗報告をしている班に比べ、子供関わる機会が少ない市民センターです。そのため、子供が少ないなら子供を呼ばなければいけない！でもどうやって？のループに陥っており、何をやればいいのか正解がないからその悩みに直面していました。しかし、加藤さんの話を聞き、市民センターの課題はこれで、そのために何をやるのかというループにはまっているのなら一回将来的にどんな市民センターであってほしいか、どんな市民センターにしたいかと考えてみたいなと思いました。とはいっても、課題を詰めることも大切だし、何か

新しいことをやろうとして本質からずれてしまうかもしれないという危惧もあります。しかし、挑戦しないことには結果は分からないので、まずは班のメンバーと話し合い方向性を再度検討したいと考えています。

また、ファンはファンを作るという話も印象的でした。今まで市民センターを利用していない人に利用してもらおうと考えていましたが、今利用されている方に魅力を聞くことで、市民センターの今の状態を好きな層は誰なのか、市民センターの熱烈ファンを探してぜひ話を聞いてみたいと思います。今回の講義の中で、今までにない考え方や、発想を学ぶことができたので、これからの市民センターの活動に生かしていきたいと思います。また、加藤さんの講義の中で、たくさん本を紹介していただきましたが、読書をし、着想を得て行動に移す際に何か注意していることや、工夫している点があれば教えていただきたいです。貴重なお話ありがとうございました。

少数派がまちを変えるという言葉がとても印象に残りました。一般のお客さんの意見を聞いていたら売上が上がるという考え方を改めて、少数派の意見で考えると、少数派(ファン)は勝手に魅力を伝えるとおっしゃっており私には考え付かないことだなと思いました。少数派(ファン)の利点として1つの視点ではなく様々な視点から細かい意見を聞くことができるところが挙げられます。FM 実習の話し合いで様々な意見が出てきたときに多数決で決めてしまうことが多かったのですが、今回の講義を受けて少数派の意見も視野に入れることによって誰も考え付かない新しいものを生み出すことができるのかなと思いました。また、加藤さんがまちづくりにおいて人間関係が良好だといとおっしゃっていました。何かを作り出すことと人間関係は関連していることを知り、地域創生学群は何かを作り出す側なので人間関係も意識して自分も相手も意見を言えるような関係づくりを今後過ごしていきたいなと思いました。

私はおいしい革命を起こそうというトピックの地元の人が地元が異なる友達を連れてきたくなる街づくりを目指すという言葉が印象に残った。実際に地元が鹿児島県の私も、鹿児島は自然が綺麗で友達を連れてきたいと思うが、生まれ育った都市に連れてきたいかと思うとそう思わない。特に何も無い町と感じてしまう。なので、まずは自分が行きたいと思えるような街を作っていかなければならないなと実感した。

一番印象に残った言葉は『地域に新しいチャレンジを作る仕掛けが必要』だという言葉です。加藤さんは仕掛けを『月一のマルシェ開催』としていて、その地域の商売をしている人を守り育てているとおっしゃって地域の商売人を大切に育てることで近所を素敵に変えることができるということがわかりました。地域を盛り上げる際に、地域の方々と一緒に仕事をして地域に新しいチャレンジを創出できる可能性を上げていくことはコミュニティも生まれると思うのでとてもいい方法だなと思いました。小倉でお金を落とすから下関方面にはいく人が少ないという話を聞いてとても共感しました。月一マルシェはどこで開催した時が一番反響があったか気になりました。

今回の講義の中で、加藤寛之さんの「人口減少を楽しく生きる法則」「少数派がまちを変える」というお話が印象に残りました。誰もがマイナスなイメージを持っている人口減少問題ですが、「これから」は個性や少数が生きていき、良いこと探しをするといった考え方や発想力にとっても感動したからです。私もどのような問題・課題であっても、悲観的に捉えるのではなく、その状況をどのように活用できるか、前向きな考えに変換できる人になりたいと思いました。

今回の加藤さんの講義を受けて、町づくりに関する活動を行う中で重要になるポイントやヒントを学ぶことが出来た。中でも「これまで」と「これから」と「地元の人が愛してやまない場所作り」の2点が心に残った。

「これまで」と「これから」は、現代の常識は「これまで」の社会で作られてきたモノであり、今後の常識ではない。そして、現代社会での違和感は「これから」の常識の始まりという内容であり、この先、街づくりして中で中枢になるような考え方だなと思った。

世の名の言葉には「先人にならえ」という言葉があるが、変化していくこの世の中では、「ならう」ことだけでは駄目であり、違和感を見つけそこにアクションしていくことが大切だと考えた。私は、活動するときにまず、事例の模倣を先に考えてしまう、しかし、同じことを真似するだけでは駄目ということを学んだ。今後は時代の流れを知り未来に対応するような活動にアクションしてみたいと思う。具体的には、行動する中で感じた違和感を大切にし、その違和感がどこからきているのかを探るといふ鼓動を積極的に取り入れようとする。

「地元の人が愛してやまない場所作り」は加藤さんが町づくりする時に意識していることであり、町づくりでは「観光観光、、」と考えてしまうことが多いが、そこに住んでいる人から愛されるようなリノベーションが求められるという内容だ。

町づくりではどうしても魅力づくりのために、外部に視点を向けてしまう。しかし、本来の町づくりの目的は地域内部にあるのではないかと気づかされた。地元の人が愛されるような町づくりを心掛けることで、「その地域の人が何を要望しているのか」や、

「その地域の本来の強み」を大切にすきっかけにもなると考える。今後、町づくりマネジメントする際は、地域を見て、地域を対象にした、地域住民に愛されるような事業を考えていきたい。

今回の講義で最も印象に残ったことは、地域に新しいチャレンジを創造する中で、地域の魅力を伝えるためにプロデュースするお店は、そのお店を地元の人が、友人を連れて行きたくなるすなわち地元の人が愛している店をつくるのが重要であるということである。加藤さんがおっしゃっていた、観光地のお店は、観光客がほとんどで地元の住民がいないお店ではなく、地元の人がいいと思集っている店が良いということに強く共感した。地域を活性化させるために外から人を集めようとするとき、私はどうしても外部からどうやって魅力的に見られるか、魅力を発信できるかといったように外部の視点からしか見ていなかった。しかし地元の魅力は、地元にいる自分たちが実際に生活する中で作られるものであり、発信する上で地域の住民の日頃の様子や生活が一番説得力を持つと学んだ。

今回、戦略を立ててまちづくり事業を行っている当事者から実際に効果のある戦略の立て方や考え方を学ぶことができたため、頭の中の理想やテンプレートにのっとた考え方だけでは効果がないと気づいた。

今回の講義で特に印象に残ったことは、大多数の意見よりも少数派のファンを大切にすることです。私は、市民センターでの活動の中で、市民センターに来たことがない人やまちの動きに関心がない人の意見やニーズを聞こうと、大多数にアンケートを取ろうかなと考えていました。しかし、今回の講義を受けて、まちを楽しんでいない大多数の意見やニーズを聞くよりも、少数派のまちの課題をもろともせず身銭を切っている少数派を見つけ、意見やニーズを聞くべきだなと思い、考え方が180度変わりました。そこで、アンケートを取るなら夏祭り実行委員会の方々が一番最適だと考えました。市民センターの職員さん含め、まち協の会長さんや小学校・中学校のPTAの会長さん、学校地域コーディネーターの方などの実行委員の皆さんはとても熱心で、まちや子ども達をとにかく愛されていて、まちの活動を心から楽しんでいるように思うからです。そんな方々に、このまちの今の状態での魅力とこんなまちになってほしいという理想像をぜひ聞きたいです。どんな未来を思い描いているのか、私達大学生に対して本当に求められていることは何なのかなど、それらを追求してイベントの内容をもっと詰めていこうと思いました。そして、私達の活動を通じてファンがファンを増やすという正のスパイラルを生み出していきたいです。

加藤さんの講義の中で印象的だったのは「人の気持ちや考え方はものすごい速さで変わる」という言葉である。例として出されていた画像は自分が見たらどう考えても取り壊すべきものではないと思うものだったけれど、25年前の人たちからすれば取り壊した方がいいと考えるもので、25年という時間は、あまり長い時間ではないと思っていたが、人の気持ちからすると長すぎるのかもしれないと感じた。流行りが過ぎるのが早いのも人の気持ちに移り変わりやすいからだろう。

私の母校はすごく伝統を重んじる学校で、周りの学校からは「昭和だ」とか「軍隊だ」とか言われていたこともあり、長年続く何かに対して、新しくしていくべきだという考えが強い。長く続くものは悪いことではないが、時代に適応しながら変化していく姿勢を忘れてはいけないと思う。リノベーションが普通になった今、変化することはあたりまえのこととなっている。地域づくりは常に変化を求められていると思う。新しいアイデア、新しい価値観を地域にもたらすことが私たちに必要とされる能力なのではないだろうか。

私は加藤さんのお話を聴いて、学びになったことが大きく2つあります。

一つ目は、「当たり前」に疑問を持つことです。講義中の「中心が一番いいという考えに疑問を持ったことがきっかけの一つ」という加藤さんの言葉が印象に残っています。まちづくりをしていく中で、どうしても新しいものを創り出して地域を活性化するという考えに至りがちですが、そこにあるものを再活用し、都市圏のオンラインショップでも揃えられるような商品ではなく、「ここから売れる」商品を生み出したり、住民が地域外の人を呼びたいくなるような内装や外観にしたりなど、そこに住む人に焦点を当てて活性化することがより確実で持続的なまちづくりに繋がるなと感じました。また、常識ではなく、自分が考えたことに対して貪欲に向き合い行動する。という視点が、自分の中で以前の竹馬さんのお話と繋がる部分があり、非常に納得できた部分でした。

二つ目は、少数派の意見を大切にすることです。ゴールは皆の為であるけど、プロセスの時点では皆はいらない。という考え方は、今まで地域活性化には多くの意見が必要だと考えていた自分にとっては少し衝撃的ではありましたが、町に元気がない理由を、大多数の町を楽しんでいない人に聞くのか？という問いかけを受けて、少数派がまちを変える。という考え方に対して大きく納得することができました。まちを変えるからには、現段階で地域に対して好印象を持つ少数派の方の意見を大切にしながら、ベースをそこから見つけて、活動の指針を立てることが重要なのではないかと考えました。

また、今後まちを創り上げていく上で、「しなやかな強さ」が重要であり、いいものだけを集めるのではなく、多様な方がこれから

の時代は強い」という話を受けて、このことは、まちづくりだけでなく、今自分たちが取り組んでいる実習活動においてもとても重要な考え方であると感じました。私は広報実習に所属しており、オープンキャンパス後は一年生企画がスタートするため、今回の講義で学んだことを、企画を立て実際に行動に移す中で、まずは十分に活かしていきたいです。

今回の特別講義の冒頭で加藤さんがおっしゃっていた「都市の中心がえらいという考えは違うのではないか」という言葉に地元のことを当てはめて考え、気づくことができました。私の地元はシャッター街が目立つ地域で、シャッター街をなくす目的で若者向けである流行りのスイーツショップが定期的に出店しては閉店してを何店舗もが繰り返しています。そもそもそのような店は東京の原宿などで流行ったものばかりを取り入れ、若者向けの店でしかありませんでした。結局、どのお店も流行りがすぎれば閉店してしまい、シャッター街が活性化されることもありませんでした。反対に、地元の名産品であるマンゴーだけのスイーツ専門店が人気が出て、観光客も多く入っている印象です。このように、都市の真似をしても地域の活性化にはつながらず、地域の魅力を理解した上での新しい取り組みの方が地域の活性化に繋がると気づきました。加藤さんもおっしゃっていたように、地元に住んでいる私自身が、友人に紹介したくなるようなお店を作るのが大事だと感じました。

私は講義の中で SARTO の掲げる「ご近所を素敵に変えよう」というミッションが強く印象に残っています。

加藤さんが高校時代に、日本の中心地である東京が 1 番良いという考えに違和感を感じられた事に対して私も共感する部分がありました。私は宮崎県の出身で、本学への志望動機の一部には、やはり九州の中心地である福岡県に対する憧れがあり、入学前は中心地で大多数のなかの 1 人として生活する事が良い事であると漠然としたイメージを抱えていました。

しかし、地域創生学群で学んでいる現在では、中心だけでなくそれぞれの地域のもつ強みを魅力として成長させていく事がこれから先の未来の都市運営にとって重要な要素だと考えています。

講義の中で「地元の人が友達を連れて行きたくなる店」、「地元の人が愛してやまない店」、「ちょっと町から外れた地元の人が集まる店」のような地域で生活する人が良い物だと感じられるものを作る事で人が人を呼び、またその輪が広がることで強烈なムーブメントになると言うことが理解できました。

ムーブメントはいつも少数派から始まり、その魅力に気づいた者がその輪を広げ波及効果的に普及していきます。はじめは多数派である中心から離れた地域の小さなムーブメントが、その魅力とそれに魅せられた人々によってさらに輝きを増すように、より強固な地域特有の強みとなり結果として地域活性化へと繋がって行くことを学ぶことができました。

私は今回の講義の中で「街のみんなの意見を聞く必要は無い」とおっしゃっていたことが強く印象に残りました。地域を良くするためにまず何をするか？と考えるなら私はまずどんな形でもいいのでとにかくその地域の人との交流の機会を作って話を聞く、という行動を取ると思います。それは別に間違いではないのですが、加藤さんのおっしゃっていた「街に元気がないのは大多数の人が街に興味がないか楽しんでいないから」という視点を持っていないと、なぜまちを盛り上げることに非協力的なのか？私のしようとしていることは地域のニーズに全く合っていないのではないかなどとマイナスな思考に傾いてしまい自分と地域双方のポテンシャルを引き出すことができずに終わってしまいかねないと感じたので、この話が印象に残ると共に地域に対する姿勢としての学びも得ることが出来ました。

今回の講義で 1 番印象に残っているのは、多様性は耐え難いという言葉です。私は多様性を推進するプロジェクトに参加しているのですが、多様性を容認するという事は、世間一般には悪とされている事まで許さないとイケない、多様性を理解していたつもりでしたが、そういった視点はなかったため全体を通してこの言葉が 1 番印象に残りました。

加藤さんのお話の中でも特に印象に残ったことは、まちが栄えるには地元の人に愛される場所であることという言葉です。

私の地元は下関市で加藤さんがおっしゃったように、駅周辺も最近寂しくなっています。しかし、そんな市内の中でも唐戸市場や角島といった観光地も健在しています。寂れている駅周辺や商店街とこれらの観光地の違いを住民としての自分の立場から見たときに、確かに唐戸市場や角島は何度も足を運んでいると気づきました。さらに、大学で出会った友人にもよく勧めている自分に気が付きました。その誘い方も、大学から近いということもありますが「ぜひ行ってみて」ではなく、「一緒に行こうよ」と言っているように感じます。友人にも魅力を味わってほしいし、自分も唐戸市場や角島に行きたい、一緒に楽しみたいと思える場所であることが、まちを栄えるには大切だと自分の体験からも考えることが出来ました。

そして、実習に活かせると思ったのは「少数派がまちを変える」ということです。

指導的実習や片岡先生の講義の中でも「全員がまちづくりに前向きではない」ということをよく聞いていました。その意味を今回の講義でより、深めることができました。地域のファンの姿にさらにファンがついていくこの考え方は、活動で思わず地域住民全体を巻き込むことにとらわれてしまっている今の私たちにとって大きな気付きとなったように感じます。同時に、楽しめてない

人たちの活動にだれが参加したいと思うのかと考えたとき、自分たちも活動を誰よりも楽しもうと思いました。

また、「何かを生み出すことや自分たちの代から何かを残すことが学群生としての自分の功績」とどこか思っていたような気がします。しかし、動画内での踊りだした子に続いた少年の存在こそが周りを巻き込むうえで大切だったというお話に、最初であることに価値があるのではないと思えました。

何かを興す勇氣、それに対する冷ややかな声にも負けず、自分の意思のもと後を追う勇氣、どちらも大切にして生きたいと強く思いました。そして、アイデアマンや行動力のある人が多い地創のなかに身を置けるこの環境だからこそどちらも実現できるのではないかと思います。新しさを出すことに少し焦りを感じていた自分の気持ちが少し楽になりました。

地域への熱い思いを胸に、見えているものを未来に転換できるような仲間たちの舵を切る船と一緒に乗って、互いにアイデアをぶつけ、賛同や改善をし、高めあえることができるこの環境の喜びとありがたみを噛みしめながら、全力でこの4年間を駆け抜けようと気持ちがより燃えた講義でした。

もちろん、自分から新たなチャレンジやアイデアを出そうとすることも臆することなく行っていきます！

“これから15年の地創を担う1年目の学群生”としてこれまでの学群の常識にとらわれず、未来に向かって新しいチャレンジをみんなで作っていきます。

今回の講話を通して、熱意をもつこと、そして課題意識を持つことは、何に対しても大切なのだと感じました。

加藤さんが自分の今住んでいる、阿倍野区で、ほかの地域は盛り上がっているけど、自分の住んでいるところが元気がなくなってきたと気づき、そこで「なんとかしなければ」と思うのがすごいと思いました。地創生だから「元気がないなら自分もどうにかして関わりたい」と思いますが、普通の人からすれば「元気がなくなったね、人口減ってるから仕方ないよね」くらいで済んでしまいます。

阿倍野の特定の地域を指定し、メンバーも少人数で行われたということで、とても行動力があると感じています。何かプロジェクトを始めるとき、自分はどうしてもある程度大人数を集めてからでないと、始めづらいと思っていました。しかし、今回の講話を通して、諸規模から始めたほうがリスクも小さく、そして何より始めやすいんだということに気づくことができました。加藤さんのプロジェクトを見ていると、地域の人にしっかりと、パイローカルな精神が伝わっているのだろうと感じます。

自分の住んでいる地域だからこそ、地域へ対しての愛着があればなおさら、その地域をどうにかして盛り上げたい、課題を解決したいという思いは強くなるはず。まずは、やる気のある人が率先してやって、それを見てついてくる人が必ずいるはずなので、そのような熱意のある人を自分もたくさん巻き込んでいきたいと思いました。

現在、市民センターでの活動や地元でのプロジェクトにいくつか参加していますが、今関わっていない人も、熱意はあるけど参加しづらいというのもあるかもしれないので、そんな人々を積極的に声をかけて巻き込もうと思います。

あらためて、今回講演していただきありがとうございました。

今回の講義を受けて、「まずは地元の人が愛せる店が必要」、「近き者説、遠き人來たる」などの言葉が印象に残りました。確かに観光客はお金を落としてくれると思いますが、それは個人に目を向けると一時的なものになってしまうのに対し、地元人は近くに住んでいるため、継続的にお金を落としてくれるチャンスがあるなと考えました。また、仮定とはなってしまいますが、一人地元の方が店に魅力を感じてリピーターになってくれることで近所の人にも口コミが広がっていき、店が近所にあることで試しに訪ねてくれて、そこで魅力を感じてくれた方がまたリピーターになってくれる...などのサイクルも生まれやすいのかなと感じました。正直それだけ魅力を感じて他と差別化したサービス、モノを提供するのは難しいことだと思ってしまいましたが、自分が企画を考える際は、分析からまずはしっかり行いたいと思います。他には「15分の間(範囲)で完結するような町」ともおっしゃっていましたが、その言葉も印象に残りました。私の出身は宮崎なのですが、関東の方などとお話すると宮崎ってどこ？と聞かれた経験が複数あるくらいには田舎だと思っています。そんな宮崎で15分の距離の範囲で生活が成り立つような範囲は宮崎市の中では本当に市街地の方だけだと感じていて、その他の地域は車が必需品です。ですので、15分で行ける範囲の間で生活が成り立つような町=(?)魅力ある生き生きとしたまちとはまだほど遠いと考えてしまいました。

地元の人が愛してやまない店を作るというお話が印象に残りました。お店を選ぶときに多くの人は口コミを参考にするとはいえず。特にネットに書かれたものではなく、直接、家族や友達から聞いたものは信憑性も高いので、ファンがファンを呼び、地域の1つの名物店になることができるのだと感じました。また、私の住んでいる地域にある、地元の人が経営しているお店は、チェーン店のように常に満員というわけではないですが、常連さんがいたり、誰もが知っている名店だったりします。そして、その周

<p>辺も比較的個人営業のお店が多くなっています。自分の身近なところから考えてみても、加藤さんの講義にあったように、地元の人が愛してやまない店があれば、その周辺も自然と盛り上がるんだと思いました。</p>
<p>地域を変えるにあたって、意見を聞かないといけない。その時に、大勢の意見を聴くのではなく、少人数派の意見も大切にすることが大事。量をこなすのではなく、一つ一つの質も重要にしていくことを意識している。ということをおきし、わたしもこれからたいせつにしていこうとおもいました。</p>
<p>少数が重要なのは、エリアの個性が活きるから。これまでより、これからという考え方。ムーブメントは多数から始まらない。地域を活性化させたり、貢献したりするには、この考え方がないと成功に繋がらないと感じた。これまで成功してきた人たちも少数から始まって、それが大きくなっていったんだと思う。これまでよりこれからは見ないと先に進めないと感じた。</p>
<p>私が今回学んだことは「誰でも手に入るものは水道と一緒に」ということです。片岡先生の授業で「地元にお金を出す」ことを学びましたが、やっぱりショッピングモールに流れてしまうのではないかと考えました。地元にも個人店はありますが家族で買い物の時は隣のショッピングモールに行っていました。自分の街にもあったらいいのにとさえ思っていました。ですので天王寺の再開後地価が下がった時は驚きました。チェーン店は大衆受けしそうですが、その考え自体時代遅れだと気づかされました。これからの未来を作っていく立場だという認識を持ち、地元を持ち帰ります。</p>
<p>「地元の人が来ない限り地元の人には来ないため、地元の人が愛してやまないものを作る」という言葉が印象的でした。自分が他の地域を訪れた場合、観光客ばかりのお店よりも地元の人が通っているようなお店の方が行ってみたいと思うため共感しました。また、「違和感を持ち続けることが大事」という言葉が印象的で、以前、竹馬さんと遠矢さんが登壇してくださったときにおっしゃっていた「違和感が一番チャンスのタイミング」という言葉に似ているなと思いました。多数派の意見を取り入れてしまいがちだけれど、まちづくりなどの場面では、まちのことを好きな人などの少数派を大事にするべきだということが分かりました。</p>
<p>今回の講義で、「みんなの意見は聴かない」という言葉が印象的でした。ずっと、課題を解決するためには、そこに参加しない人に「どうして参加しないのか」などのアンケートを取った方がいいと思っていました。そのため、今の状態を良い、楽しいと思っている人の意見を聴くのが大切ということに衝撃を受けました。</p> <p>また、「地元の人が、友人を連れてきたくなるお店」をつくるということも印象的でした。小倉実習の Kokulike は、「小倉に来たい」と思ってもらうために様々な小倉にあるお店や小倉で活躍されている人などを学生が Instagram などの SNS で探し、取材し、発信しています。ですが、地元ではない人が発信することもあったり、昔から愛されているお店、活躍されている方だけ、SNS を使っていない場合もあり、私たちが把握できていない場合があると思います。なので、地域の方に小倉にある自慢できるお店や人を調査するのもありなのかなと、聴きながら思いました。</p>
<p>加藤さんのお話を聞いて、「千葉に住んでいるのに、東京の方がいいというような風潮をどうにかしたい」という点が大きな学びになりました。私は博多から電車で 30 分ほどのところに住んでいるのですが、やっぱり、友達と遊びに行ったり、買い物に行ったりするのは地元のイオンモールではなく、博多や天神が多いです。私たちが博多や天神まで行って遊ぶのには、美味しいご飯やスイーツを食べたり、おしゃれなカフェに行きたいという目的で行くことが多いです。でも、よく考えてみたら、そういったお店が地元があれば博多まで行かなくて済むし、加えて地域に還元することもできることに気づきました。またお店ができれば、地元の人だけではなく、そのお店を目当てに外部からの人が訪れるようになることも期待できます。実際私の住んでいる福津市にも最近海岸沿いにおしゃれなお店がたくさんできており、SNS で拡散されているのをよく見かけます。私も大学の友達などにいっぱい紹介して、地域に還元するお手伝いができればいいなと思いました。</p>
<p>私が印象に残ったことは、冒頭部分の、現在の大人は古民家を見て見慣れているから取り壊し真新しい建物を建てたくなるものだが、若者は、見慣れていない珍しいものだから、あえて残しておきたいと思うという世代間ギャップがあることを考えさせられた。古民家カフェのブームがあったように、誰もが昔ながらの雰囲気を探求しているのだろうと思っていた。まちづくりをする上で、よく若者が率先するという傾向が見られがちだが、持続可能な地域活性化のためにも、幅広い年齢の方を交えて街の活性化を図って行くべきだと考えた。また、自分の地域で完結させるという、「Themarket」の取り組みはとても面白いと思った。私の地域も産業祭と呼ばれる地元の野菜や飲食を売るお祭りがあったが、参加者の不足により、数年前に開催されなくなってしまった。近年はコンビニエンスストアでも、野菜が買えたり、食料配達が生近になったりしたため、より一層自分の地域にお金を落とすということが重要になって来たと思うため、ぜひ私の地域の産業祭も復活させたいと思った。</p>

<p>講義でお話を聴く中で、地域の中に新しいチャレンジを創出するということが一番印象に残りました。その中で毎月何かが起こる仕掛けを作ることが重要ということを知り、私も今後地域活性化に貢献できるような活動をする際には継続的に行うことを意識していこうと思います。</p>
<p>まちづくりのためなどで店を始める時「地元で愛されてやまない店をめざす」という加藤さんの言葉が印象に残りました。まちづくりや、観光業の活性化などを考える場面で、外の人に向けて考える場合が多く、自分も今まではいかに外の人を呼び込むのかという考え方を持っていました。今回のお話を聴いて、それではその土地としての魅力やインパクトが小さく深まるものになりません。「その地域に行ったら、その場所ならではの魅力を感じたい」という外の人へのニーズに応えるためにこそ、地域に根差した住民ファーストの取り組みをしていくべきだという考え方に変わりました。</p> <p>また身銭を切つてやるからこそそのメリットがあるという言葉から、役所での取り組みが周りから不評な場合が多いイメージがあるのは直接自分のお金ではなく税金を使っているからという理由があるのかもとも思いました。自らのお金、生活をかけて覚悟をもって取り組むからこそより良いものを生み出せる可能性があると感じました。</p>
<p>私が印象に残ったことは5つある。一つ目は、「ご近所を素敵に変えよう」という言葉である。都市計画というと大それたことを考えてしまいがちである。だが、自分の暮らす地域がどういう姿であれば、他から友人等と呼ばれたり、誇りを持つことができるのかという視点で考えてみると自分事としてとらえやすくなり、アイデアが浮かびやすくなったため、この視点を持ちながら今後実習活動やイベント等を行っていききたい。その際に、視野が狭まり、客観性が失われる可能性があるため、そこを注意していきたい。二つ目は、課題にコミットするのではなくその場所の未来にコミットすることである。地域を活性化するうえで課題ばかりを追いかけるのではなく、その地域の未来の姿を想像することで視点が後ろではなく前向きになり、案出しも楽しくすることができる。三つ目は、日本の都市計画はしなやかさが重要ということである。目的に合わせて機能ごとに場所を分けることは一見便利に見えて耐久性を失うことにつながる。このように一つのことに舵を切ってしまうが、臨機応変に対応できるしなやかさ、多様性が重要だと学んだ。そして、これは何事においても言うことができると考える。四つ目は、少数派の意見が重要だということである。「町が衰退している理由として大多数が町に興味がないからだ」という言葉が強く印象に残りました。また、「聞く必要があるのは課題をもとめせず、町の未来を見据えて自分の町を楽しんでいる人の意見」という言葉も強く印象に残っている。五つ目は、ファンはファンを増やすということである。ファンは何かを本気で支援する人であり、その人たちの熱量が広まることでさらに魅力が広まっていく。魅力を広めたいときに、ファンの力を借りることも重要なことだと感じた。以上の5つのこと以外にもたくさんの学びを得ることができた。これらを実習だけにとどまらず普段の生活からも生かしていきたい。</p>
<p>地元の人が少ない店より地元の人が愛してやまない店に観光客はくるとい言葉はとても納得させられました。まちづくりのことを考えるととりあえずその地域の特産物とか郷土料理ばかりを考えてしまうけどそんな店を作るんやなくておいしいお店を全部まとめてロードマップみたいにした方が観光客にも地元の人にもいい効果があるんだと思った。</p>
<p>少数派は街を変えるという話を聞いて私は少し違うと考えました。確かに街を変えようとする意思は大事ですが、大勢の変えようとする意思がやはり鍵になってくると思いました。</p>
<p>今回の加藤さんの特別講義で私は特に凄まじい多様性を生み出す4つの条件が特に印象に残りました。小さなエリアで用途が多様であること、街区が短く角を曲がる機会が多いこと、新旧の建物がきめ細やかに存在すること、高密度に人々が密集していることが必要であることを知った。結論多様性は耐えがたいことをしり、機能的都市へ移る必要があることを知った。分化して頑強な都市づくりが大切ということ学んだ。</p>
<p>1番印象に残ったことは、これまでと逆のことを考えてゆく、人口減少の常識を持つべき「課題ありきから未来ありき」への転換である。この先、日本は勿論世界中で人口減少が起きるとされており、自分たちが生きてゆくには発想を柔軟に応用することが大切だと感じたからである。あべのハルカスが完成して以降、天王寺は商業施設が供給過多だと実感していたこともあり、お客さんに地元の店に振り向いてもらう昭和町付近で行われている buy local についての話も私の地元から近く行ってみたいと感じた。新しいものが好きなのは当然な事かも知れないが、すでにある魅力を伝える事ができるような人になりたいと考えた。</p>
<p>今まではこうだったけどこれからはこうしないといけないという逆の考えがこれからは大事になると分かりました。まちづくりには大勢で始めるのではなく、少数から始めていき徐々に増やしていくことの大切さも学びました。</p>
<p>加藤寛之さんの講義を受けて、説得力の凄さに驚かされました。私は、ほとんどの人が多数派の意見と少数派の意見では多数派の意見を大事にするという人の方が多いと考えていました。加藤さんは少数派が重要だと述べられていて、個人的に加藤さん自身の考えが少数派だと感じました。しかし、加藤さんの少数派を大事にしながら行っている活動のお話を聞いて、すごく成</p>

<p>功していると思いましたが、これから先まだ色々な発展がありそうだなと感じました。</p> <p>少数派を大事にした結果、活動が成功していると感じ、説得力が凄いと感じました。</p>
<p>私はこの講義でまず、これまでとこれからの人口の変化やそれぞれ起こることなど詳しく学びました。また、次に都市はどうあるべきなのかについて学びました。凄まじい多様性を生み出す四つの条件を学ぶことができました。そして、最後に少数派の大切さについて学びました。誰か 1 人の冒険により、それを真似する人たちができ、社会の生産性を増大させることを知り、面白いと思いました。</p>
<p>講義の中で何度も繰り返していた「少数派が未来を変える」という言葉が一番心に残りました。私は高校時代に、地産地消を考えるプロジェクトに参加したことがあるのですが、その際に、その参加者が十数人しかいなかったことに、「こんなに地産地消に意欲のある人は少ないのか」とも落胆した記憶があります。しかし、講義を終えた今考えてみると、地域を変えたいと思う人が少数派であることは当たり前のことで、あの場にいた十数人の少数派の方々が地域を変えたいとっていて、そういう少数派が地域に存在しているだけでも、地域に変革を起こす可能性はあるな、とポジティブに捉えることができました。将来、様々な地域の活性化を目指す私は、少数派の立場にいることが多くなるかもしれませんが、それをネガティブに捉えず、少数派である自分を誇れるくらいの気持ちで行動していきたいと思います。</p>
<p>今回特に印象に残ったのは、少数派がまちを変えるということです。そのまちを楽しんでいる少数派の人の意見を聞くことで、ご近所を素敵に変えるというワードがとても頭に残っています。私の好きなアーティストに友達や家族がハマることがあるので、ファンがファンを作るということはわかりますが、これがまちづくりにおいても考えられるということを知ることができました。このような、まちづくりとはあまり関係のなさそうなことをまちづくりにつなげる視点はとても大事だなと感じたので、普通の人にはない視点を持てるようになりたいです。</p>
<p>加藤さんの講義を聞いて印象に残った言葉は、「少数派はまちを変える」です。だいたいまちの方針や普段の小さなことでも、多数派によって結果が決まりがちで少数派は無視されることが多あとと思います。たしかに、そこで少数派を考えてみると、何かが変わって新しいものが生まれる可能性もあるんだなと面白い発見ができました。</p>
<p>私が今回の特別講義の内容で印象に残ったことは、まとめのお話の中で、「初期採用者がカギを握る」とおっしゃっていたことです。具体的に、最初に取り組もうと気持ちの面でやる気を持った人が企画の統括やまとめを行う立場になるということが私は一番大切であると思っているので、この言葉はとても心に響きました。今後、自分が何かのまとめ役や企画の提案をする際は、自分は大事な役割を担っているという責任感を常に忘れないようにしていきたいです。</p>
<p>「少数がまちを変える」という言葉が印象に残りました。大きな町、特に町全体が盛り上がっている場所というのは町の人全員が積極的に活動することで成り立っていると思っていました。しかし、始まりは少数の人の声と行動力。それから、それについて行く勇気ある人々の力のおかげで少しづつ町が変わっていくという、まちおこしの原理が良くわかりました。</p>
<p>今回の講義で大勢に聞くより地域を愛している少数を大事にするということが印象に残った。なので、キッズトレーニング実習でも少数意見を鼻であしらうのではなく、小さな意見を大切に柔軟な対応ができる実習にしたい。</p>
<p>私は、長崎県の佐世保市という街の出身です。明治維新以降、日本屈指の軍港として発展しました。ですが、近年の佐世保市は全国的に見ても人口の減少が凄まじく、現在 23 万人程になっています。私は、そんな地元を政令指定都市にしたいという強い思いを持って地域創生学群に進学しました。</p> <p>今日加藤さんのお話は、私が思い描くまちづくりのお手本のようなお話ばかりでした。特に、凄まじい多様性を生み出す 4 つの条件という場面がとても印象に残っています。地元の特徴として、海と山が隣り合わせで街と呼ばれるような範囲が他の地域に比べてとても少ないです。なので、建物が密集しており、お隣同士やそれ以外の人でも距離が自然に近くなります。街としての機能を一極に集中させるのではなく、分散させて市民が暮らしやすいと思えるような街づくりを行いたい。このことが地域創生への第 1 歩だと考えています。</p>
<p>私は、「ストリートで生き活きとして、温度感があり、それが、日常である」まちで将来暮らしたいという話に、すごく共感した。実習で『つまみぐい大作戦！ in 且過市場』というものを企画しているのだが、且過市場は、近隣住民の買い物の場として、なくてはならない場所になっていて、店主さんとのあたたかいやり取りも魅力の 1 つであると感じる。且過市場では、八百屋、鮮魚店、精肉店の店主の「これ買わんね？」や「これ美味しいよ～」という声が響き、惣菜屋では「これどんな味？」という会話がなされていて、私なりに考えた「良き商い」の集まりだと感じる。</p> <p>「少数派のファンの声を聞くことで、新しいファンをつくる」という話で、「元気がないまち」を楽しもうとしている少数派こそ、その</p>

まちの本質を見ているのかもしれないと感じた。まちづくり事業でも、対象地域に住む不特定多数の意見を聞く前に、まずは自分が、その地域を「楽しむ側」、その地域を「好きな人」になることで、よさやウィークポイントを身を以て理解することができ、ありきたりなものではない真の魅力を広めたり、ウィークポイントをその地域にあった方法でプラスに変えることができるのではないかと考えた。

旦過市場でのプロジェクトにおいても、最初は認知度ゼロから始める事業のため、まずは、プロジェクトメンバーに旦過市場ファンになってもらい、イベントを進めていく。そして、普段から旦過市場を利用している旦過ファンを巻き込んで、「その人にとっての旦過市場の魅力」や「旦過市場が将来どんな場所であってほしいか」などをヒアリングすることで、自分たちの目では気づけなかった旦過市場の「良き商い」の要素を引き出すことができ、再開後も残り続ける魅力を伝えられるプロジェクトをファンと作り上げていけると考えた。

また、「これまでの常識は、人口が増える中で作られた常識であり、これからの常識は、これからの世代が作るものだ」という話を聞いて、これからの新しい常識を作るには、まず、これまでの常識やルールを知る必要があると感じた。これまでの失敗事例が、実は、その当時に合わなかっただけで、今の時代には合ったやり方だということもあるかもしれない。これまでの成功事例を真似るのではなく、これまでの失敗事例の失敗原因と理想の未来のまちとを掛け合わせることで、今までにはなかった考え方の視点を持っていく。

加藤さんに質問です。

顧客がいない状態から始めるイベントや事業において、認知度ゼロの状態から認知度を上げることは、苦勞する点も多くあると思います。お客さんからの認知度を上げ、参加店舗も増やしていった方法を教えていただきたいです。

加藤さんの講義の中で印象的だったのは、さびれた地域にはチャレンジがないという

ことです。私の地元は市の中心には大きなデパートや施設はありにぎわっているけれど、それがチャレンジとは言えないし、中心から離れていくにつれてにぎわいは消えています。一方で、私が高校生のときに訪れた舞鶴は、京都の都心から離れた地域で田舎ではありましたが、地域おこし協力隊の人はもちろん地域の工務店の人など若い人が中心として、商店街にカフェを開いたり、古民家の宿をつくったりと新しい取り組みをしていました。外の地域を見たときに、一見は田舎に見えるかもしれないけれど、私は新しいものを作り出そうとしている地域のほうが魅力的に感じます。チャレンジやチャレンジする人の姿に魅力があって、それが地域の人を惹きつけるし、地域の活性化になると思いました。

ファンがファンをつくるという話が印象に残りました。多くの人に向けてサービスをするを目標にせずに、ファンの人に集中してサービスの質を高めることでファンの満足度を高めることが新しいファンを作り出す。これまでの自分にはなかった考えでした。とにかく多くの人に知ってもらうことが大切だと思っていました。自分から宣伝しなくてもお客さんが宣伝してくれる方が効果が高いだろうなと思います。ご近所を素敵にするという考えが素敵だと思いました。インバウンドや観光客狙いじゃなくてという話でハッとしました。観光客狙いすぎて本来の地域とは別のものであるような薄っぺらくなるような感覚はこれだったのかと思いました。講義をきいてもっと地元の人が誇れるような活動がしたいと思いました

「近き者悦び、遠きも者来る」という言葉が印象に残りました。地創に入って、まちの活性化とか衰退している地域のまちおこしとかやってきたけど、観光客を呼ぶだけではなく、まず地元の人が地元を愛するまちづくりをする必要があると感じました。私は地元が好きなので、それを自ら発信して活性化させたいと思いました。今からでもインスタや X を使えばできることだと思うので、帰省のときなど実行したいと思いました。

少数派がまちを変えるというトピックで、「みんなの意見を聞かない」というお話がされたのはとても驚きでした。FM 実習で市民センターに通う私はアンケートで地域の人の意見を取り入れることに必死でしたが、大多数はまちを楽しんでおらず、関心がないのならば、確かに大多数の意見を聞こうとする努力はあまり意味がないのではないかと感じました。だから、沢山の地域の人にアンケートに協力してもらうことが無駄という訳ではないけれど、まずは原点に戻って、1 番近くでサポートしてくれている市民センターの館長さんや職員の方と深く意見交換を試みようと思いました。その過程を経て、最終的に地域のためになる地域の課題の発見をしていきたいです。また、駅の近くにお店を開かなくとも、地元の人に愛されるお店ができれば、次第に周りにお店ができていき、通りが賑やかになり、地域の活性化に繋がることを学びました。ひとつのお店の周りに徐々に新しいお店ができていくという状況が実際に起こっていて純粋に感動しました。確かに、赤ちゃんを連れてお母さんが自転車でスーパーに行ってお会計をして帰ってくるよりも、近くの商店街に歩いて行って、店先でお会計を済ませて帰ってくる方が楽し、地域にも貢献できるため非常に良い地域循環になるのだと納得しました。今後、私の地元にも八百屋さんが軒を連ねる商店街がある

<p>ので、スーパーではなくそこに足を運ぶことを意識しようと思いました。とても学ぶことが多く、有意義で楽しい時間を過ごせました。ありがとうございました。</p>
<p>地域創生プロセスにおける戦略の役割について学ぶことができました。たくさんの考え方がある中でご近所を素敵にするというシンプルな思考に辿り着き、それぞれの地域が持っている魅力を引き出すために何をするか考え、行動している所は素晴らしいと感じました。また、19世紀のオスマンのパリ改善など都市経営課題についても学ぶことができました。最後に1番心に残ったのは少数派が町を変えるということです。小さな経済圏が未来を変えるまた、食卓が変われば世界が変わるなど身近なことから大きいことについておっしゃっていたことはとても心に残りました。</p>
<p>「地元の人が友人を連れてきたくなるお店」「地元の人が愛してやまないお店」という考えがとても印象に残った。今は社会的にも観光に注目されがちだし、いろんな施設やお店が観光客を対象とした取り組みをしているのを見かけるけど、私も実際に観光客ばかりでなんだか想像と違ったなと思うことや、何となく残念だなと思うことがよくあったので、観光客だけ呼んでも意味がないという言葉を実際に聞いて、この感覚を持っていてもいいんだなと安心できた。「ご近所の良好な人間関係」や「ストリートが活き活きとして温度感があり、かつそれが日常」というまちは今の私が理想とするまちの姿なので、それぞれのまちを好きでいられるような仕掛けを考えていきたいと感じた。</p>
<p>近き者喜び、遠き者来る。この言葉が全てを表していると感じた。観光客等を増やすために、今までは最新のものを導入しないといけないとか、なにか違ったものを作らないといけないとか考えていたが、そもそもそこに住む地元の人々が愛してやまないお店が結局お客さんを呼びよせることに納得した。市民センターの活動で、課題解決のために、他の班と何か違うことをしなくては、と考えてばかりいたが、その校区の方々が何を求めているのか、何があったらこの校区が1番住みやすいと感じてもらえるか考えることが大事だと気付けた。</p>
<p>今回の講義で印象に残ったのは「これまでは課題ありきだったけど、これからは未来ありきになっていく」という言葉です。これまでの建築メインの状態から、イノベーションメインの状態に変化しているという言葉聞いて納得しました。これから私たちは、今までの形と変わっていく現状についていかなければならないので、そこを柔軟に対応すると考えると学びにつながったと感じました。</p> <p>これから未来ありきになっていくと考えると、常に先を見て行動していなければならないと感じたので、実習や活動の中でそう行動していこうと気づくことができました。</p>
<p>本講義を通し、地元の人が愛してやまない店を作るという内容がとても印象に残りました。地元の人が周りの人を連れてきて行きたくなるような場を作ることで、定住人口を維持し地元の人が賑わう場を作ることができることを学びました。また、地域住民や一部のファン層を大切に愛される店を作るという内容を生かし、動物愛護ボランティア活動をしていきます。現在、私が運営している企画では動物愛護に関する裾野を広げる活動として保護動物ふれあいカフェや学校訪問などを行っていますが、まずは動物保護に興味のある方や企画スタッフとして参加していただいている方から保護団体に参加してもらうことや継続して参加していただけるような活動をしていくことが大事だと気付きました。参加していただいていることに感謝し、新規獲得だけでなくイベントの開催をしていきます。私たちの行う活動を参加している方が胸を張ってほかの方に紹介できるような活動をしていきたいです。</p>
<p>加藤さんのお話を聞いて印象に残った言葉は「ムーブメントは多数から始まらない」という言葉である。私はFMラジオ実習の班の中で活動目的を考えた結果、多世代間を繋ぐ緩衝材としての役割を果たすという目的を立てた。そのためには全世代に対してのアプローチが必要であると考えていた。しかし加藤さんのお話を踏まえてまずは市民センターへの訪問率が少ない若者世代に目を向けて少数にアプローチをかける必要があるのかもしれないと考えた。また「年齢によって大切なことが異なる」という言葉も印象に残った。高齢者にとって価値のないものでも若者にとってはめずらしくて興味のひくものかもしれない。また逆もしかりで私たちにとって価値のないものでも年齢によって価値観が異なるという視点を持って実習に取り組んでいくと今までなかった視点から企画を考えることができるのかもしれないと思った。</p>
<p>さびれている地域にはチャレンジが足りない＝チャレンジしたい人がいないという点で、この意見には賛成もしますが、少し違う部分もあるのではないのかなと思います。チャレンジしたくてもできない環境、チャレンジしても経済的に続けることができない状況はあると思います。私の地元も正直さびれている地域ですが、チャレンジしたい人は多くいます。私はチャレンジしたい人がチャレンジできる環境を整えることが大切だと思います。</p> <p>また、少数派のファンを大切に、そのファンが新たなファンを作るという流れも地元に取り入れたいと思いました。</p>

私が今回の授業で一番印象に残った言葉は、「みんなの意見は聞かない」という言葉です。街づくりをする上では、多数決で決まってしまうことがおおいので、その言葉を聞いたときは驚きました。これは、まちづくりの観点だけではなく、普段の生活にも使えることだと思います。私の性格上、複数の意見を聞くと、自分の意見がわからなくなってしまって、自分の考えが揺らいでしまうことが多いです。だから、すべてを取り入れようとせず、自分の意見をきちんと持てるようにしようと思いました。

都市が必ずしもいいものとは限らず、自分たちのまちを良いものにしていく取り組みが今後では大切だと学んだ。また、これからの経営では、一般客を増やすことではなくファンがファンを増やすことになるためファンへ向けた経営戦略が大切だと知れた。フォロワーが経営を支えることになるためそこに力を入れることも大切である。少数派が未来を変えるというフレーズも印象に残った。行動をすることが出来る少数派の人がこれから先の未来を大きく変えていけるということを改めて認識することができた。

栄えた都市に遊びに行くことだけが楽しいわけではないかもしれない。物はネットで何でも買って、ウーバータクシーで出かけるという暮らしが本当に楽しいのだろうか。と加藤さんが言われているのを聞いて、今までに考えたこともなかったことで、とてもワクワクしました。これだ！と思いました。私は、衰退している地域を元気にして日本全体を元気にしたいと思って地創りに来ましたが、加藤さんの問いを聞いてみて、衰退している地域を元気にしたいというビジョンを、より鮮明にすることができました。そのビジョンの前提に、「たとえ常識や大多数の意見とは違っても、自分の感覚を信じる」ということを付け加えました。これで独りよがりになってはいけませんが、周りを見渡してみても、みんなはこうするけど本当にそれがいいのだろうかとか常識を疑うことで、みんなの常識をさらに超えた楽しさや幸せを生み出せるかもしれないし、何より生み出したいと思ったからです。加藤さんのように、自分が違和感を持ったこと、自分が身の回りを見ていて感じたことをベースに活動すれば、モチベーションを高く保てるし、何より楽しい面白いと思います。この講義で印象的だったのは、具体的なデータやたくさん的人物の話が出てきたことです。加藤さんは、沢山の知識を取り入れようと意識されているのだなと思いました。知識を取り入れることは、責任を伴う活動においては絶対に必要ですし、自分の感覚を信じて行動する際に独りよがりになることを避けてくれると思うので、まずは紹介していただいた本を読んで、知識を身に付けていくことにしようと思いました。講義を聞いて最も衝撃を受けたのは、「少数派がまちを変える」ということでした。最初に物事を始める少数の人によって、最終的には社会を変えることもできるということには希望がありました。私は、政治に対する国民の意見で、どうせ変わらないとあきらめている人がいたことを思い出しました。また、大学で周りを見ても、自分の人生のことであるにも関わらず、どうせこのまま何も変わらず平凡にいくのだろうと考える子が複数人いるなど感じています。しかし、多くの人々がこのように思っている、このようには思わない私を含めた何人かで、皆の気持ちを明るく希望にあふれた方向に変えられるかもしれないと思ったら希望を感じました。皆の気持ちを変えようと傲慢な感じがしますが、皆自身が変わった後のほうがいいと思えるのなら、変えて良いのだと思います。私は、ted talk で最初に踊りだした人のように、皆が「どうせ～」とあきらめている常識を変えて、皆の気持ちをも元気にする、そのきっかけの少数の人になりたいと思いました。ここには書ききれない学びもたくさんあったので、それらも吸収して成長させていただけます。

私が今回の講義で1番印象に残ったことは、街に元気がない理由という切り口から始まった、この事が盲点であったと私は感じた。まず加藤さんは、街がない理由として大多数はまちを楽しんでいないと教えてくださった。私は一般的な人と比べるとまちを楽しんでいたの、私以外の人も同時に楽しんでいると錯覚していた、まちを知り尽くしプロフェッショナルである加藤さんが言うならそうである。楽しんでいない大勢の人の意見を聞いてそれに合わせても仕方が無いし、それはおかしい。本当にまちを良くしたい、まちがより良くなって欲しいと思うならば合わせるべきはまちを楽しんでいない大多数の人間ではなく、まちを本当に楽しんでいるここでは少数の人間であるということ。これは盲点であった。また、まちを楽しめるようにしていくのはこれもまた、大多数のまちを楽しんでいない人ではなく、まちを既に楽しんでいる少数の人間たちであるということも今回の講義で学ぶことが出来た。少数の人が先頭を切り、一般人を巻き込んでいく。こんな地域創生学群にピッタリなフレーズを無駄にはしていない。そんなことを学ばせていただいた貴重な講義であった。

まちづくりのことで意見を聞くときにはたくさんの人に聞くのではなく、そのまちをよく知っていて、愛を持って接している人に聞くべきというのが驚きました。今まで意見を聞いたら色々な人の意見を聞いて様々な視点から物事を見るのが大切だと思っていたが、まちづくりにおいてはそのまちのことをよく知っている人に聞くことで、より詳しくそのまちを知ることができて、そのまちの的確な課題を見つけることができると学びました。今 FM でもう少ししたら成果発表があるので、グループの人たちと地域の人たちから話を聞きたいねなどと話していたので、色々な人に聞くのはそうだけれども、まちのことをよく知っている人にも話を聞くべきだと思った。

まず印象に残ったこととして、人間関係が幸せに直結するという話です。お金がいくらあっても人間関係が良くないと、幸せにはならないことは加藤さん以外にも、バイト先の大人の方も言っていて、大人が口を揃えて言うのだから間違えないのだろうと思いました。

次に印象に残ったのは、しなやかな強さがまちには必要だと言うことです。一つのことに特化していると、その部分がダメになると全てがダメになってしまうからこそ、多様性が必要なんだと思いました。

そして、少人数がまちを変えろと言う意見には、はっとさせられました。元気がないまちを元気あるまちにしようと、住民のニーズに応えようとするのが私の中での地域創生だと思っていました。だから、まちの魅力を知らず、楽しんでいない大多数の人の意見を聞いても、まちを変えることはできないという、加藤さんの意見には感銘を受けました。

今回の講義で最も印象に残ったことは、地域活性化を図るには地域を楽しんでいる人と一緒に仕事をすることです。私は地域の課題を解決するためにどうしたらよいか考える際、地域の欠点に着目してどうやってその欠点を改善するかにばかり気を取られていました。しかし、今回の講義を聞いてどんなに地域の課題について知識を深めたとしても地域を楽しむ気がなければ地域を盛り上げることはできないし、周囲の人の興味を引くことはできないと気づかされました。

以前、ある授業の中で地域の魅力について話し合うグループワークがあった際、なかなか思い浮かばず困ったことがあったのですが、あまりそれについて問題意識は持ちませんでした。しかし、地域活性化を目標にしていながら地域の全体像が見えていないということは、地域の可能性を自分で勝手に決めつけてしまい、地域を活性化させる新たなアイデアに繋がらないと反省しました。自分が生まれ育った地域なのだから地元についてはほかの人よりも詳しいだろうと慢心せずに自分から地域の良さを知る努力を怠らないよう、日々情報を得るためのアンテナを張ってたいです。

また、現在行っている FM 実習でも市民センターの課題を解決することだけにとらわれず地域や市民センターの良さにも着目し、今よりもさらに活気づけていくためのヒントを得たいと考えました。今までたくさんの方が市民センターを利用し多くの時間を過ごされてきた理由などからも着想を得て、私たち大学生だからこそできる取り組みを行っていきたいです。

加藤さんの特別講義で印象に残った点は、少数派が社会変革の鍵を握るという視点と、地域の経済圏の重要性です。少数派によって始まる変革はイノベーターや初期採用者が普及の鍵を握り、多数派は現状に満足して変化を嫌うため、変革の動力は少数派にあることを学びました。また、地域の農家や地元の資源を守り、活用することが持続可能な地域社会の形成につながることも重要なポイントだと思いました。

学びとしては、地域の小規模経済圏を活用し、地元の特産品や魅力を生かしたビジネスの展開が地域活性化の鍵となることや、ムーブメントは少数派から始まり、その影響が広がることで大きな変化をもたらすという点を学びました。具体例として、町家のリノベーションや地元産品を使ったマーケットの開催から、普及の S 字カーブ理論を基に、少数派の初期段階からムーブメントを起こす重要性を学びました。

さらに、都市や地域の発展には多様性を担保しつつ脆弱性を持たせることが重要であり、異なる機能や特性を持つエリアが協調し、柔軟に対応できる都市づくりが求められることに気づきました。また、地域の良好な人間関係が都市の活力や安全を高め、街全体の幸福度や住みやすさを向上させるという考え方に共感出来ました。これらのポイントは、地域社会の発展や都市計画における重要な視点だと感じました。

加藤さんの前説で「周りの友達に自分の住んでいる街を自慢げに言えたら凄い素敵じゃない？」という言葉が印象に残った。それに加えて「それぞれの地域の魅力が亡くなった日本は面白くない？」という言葉に私はとても共感できた。最近、TV で取り上げられている「来日外国人に人気のスポットを紹介！」というようなコーナーで紹介されているのは地方の商店街や自然豊かな村などが含まれていた。その TV で来日した外国人の方々は「日本人の本当を知りたい」とおっしゃっていた。恐らく、人の優しさやどのように自然と向き合ってきたのか、どのような歴史を持っているかなど、その土地ならではの魅力を求めているのだと思った。けれども、今の日本の観光は東京・大阪・京都という観光地としてすでに有名などころばかりに力を注いでおり、「地域ならでは」という面に対してあまり興味関心やお金が回されていないように感じる。そのため、私が観光に携わる仕事を将来行うなら、衰退地域が観光に力を入れようとして外国人ウケを狙ったお店を造らずに地域の魅力を活かして、この街だからこそ！と感じられる空間や雰囲気を作っていくことに尽力していきたい。また「リーダーは最初のフォロワーがいなくてリーダーになれない」という話は今までの自分にはない考え方で、リーダーだから偉い・凄いというわけではないんだと気づくことができた。そして、この話を聞いた時に以前、竹馬さんがおっしゃっていた「一人にできることは高が知れている」という言葉が頭に流れてきた。やはり社会で何かやっていくには人とつながりが必要不可欠なのだ改めて感じた。今後、私がリーダー的立

場に立ったときは周りに人からリーダーにさせてもらっている立場にあると謙虚に振る舞いながらも、リーダーとして責任のある判断を下していきたい。

私は今回の特別講義で「ご近所を素敵に変えよう」「地元の人が友達を連れて行きたくなるお店」という言葉がとても印象に残った。活性化、と言われれば外から人を呼び込むことを第一に思い付く私にはあまり無かった視点だからだ。

思い返せば、私の住む地域の近くでは観光客はよく訪れるものの地元の人あまり、と言うより殆ど行くことがない施設がいくつかある。観光スポットあるあるだと今までは特に気にしていなかったが、こういった場所こそ地元の人魅力を感じられる所にするべきなのだと今回の講義を聞いて感じた。

講義の中で後半に地元の良いお店をまとめた地図が出てきたが、あれは素晴らしい事例だと思った。初めてその地を訪れた人は勿論、地元の人であっても中々知らない所謂穴場を発見する手段の一つになり得る。もし私がそのような地図を作成することになったら是非、年代に応じたオススメ施設や様々な配慮がされている箇所をまとめたより便利なものにしたい。

地元の人が魅力を感じ、人に伝えることでご近所(地域)の活性化に繋がる。簡単なことに思えて実は忘れてしまいがちな事の重要性に改めて気付いた。

加藤さん、本当にありがとうございました。実習で活性化についてのプロジェクトに取り組む際は新規参入、呼び込みは勿論ですが元よりその場所に住む人々が地域の良い所を見つけられる事業もやってみたいと思います。

最後に質問です。

加藤さんは現在まちづくりに関する素晴らしい事業に携わっていますが、まちづくりという分野に興味を持たれたのはいつ頃からですか？また、学生時代に注力されていたことや(興味を持たれたのが学生時代であれば)活動に際して工夫していたことについて教えてください。

今回の講義で印象に残ったことは少数派画町を変えるということとゴールはみんなのためにということです。これまで何かを判断する際なかなか決まらない時は最終的にめんどくさくなったりして多数決で決めてしまう経験が多くありました。しかし今回の講義を聞き、多数派にはないような今をしっかりと捉えられているのが少数派だと言うことに気付かされました。先のことしか見るのではなく、今日の前にあるものをしっかりと感じ未来に変換できる人材になりたいと感じました。また少数派の意見を大切にしつつも、最終目標はみんなのためにということをお忘れずそこにたどり着くまでの過程は全員で取り組むことを意識したいと思いました。今後も FM 実習で市民センターに通い自分たちで企画し運営を行う活動を予定しているが、自分の地元だと思い、そこに友人を連れてきたいと心から思えるように考えていきたいと思っています。

'地域に新しいチャレンジを創出する'という言葉聞いて、これは学群でいう、"なければ、つくればいい"という考え方と同値だと思いました。今までのゲストスピーカーの方々のお話を通して、成功している人は共通して自分がやりたいことに対してぶれることのない軸をもっていると感じました。今回の加藤さんの軸となっていることは、『近所を素敵に変える』ために『新しいことにチャレンジする』ことだと思いました。加藤さんのチャレンジの中で私が特に印象に残ったのは、"Buy Local 地元のものを買う"、"Cook book おいしい革命を起こそう"の2つです。1つ目の Buy Local では、普段行かないようなお店を知れたり、存在を知っていても入りにくかったお店に触れたりすることができます。これは、自分のご近所で自分のお気に入りのお店を見つけることで、そのお店が活性化したり、その場所が自身の第三の場所になったりといった居場所づくりの観点から見ても利点があると考えます。また、このことは自分自身のメンタルヘルスにも効果があると思います。2つ目の Cook Book では、ご近所の料理人とレシピを住民に公開します。この取り組みから期待できる効果としては、お店の認知度向上と、実際に家で作って食べることによって、住民の来店欲求を生み出し、お店を訪れる客が増えることが期待できると考えます。また、私は北九州食スマイル実習に所属しており、「食」に焦点を当てた地域活性化の取り組みに興味があることが、特に印象に残った理由だと思います。また、レシピを配るという取り組みは、北九州食スマイル実習でも実施できそうだった。学内出店で自分たちが販売した料理のレシピも配ることで、自炊につながり、生徒の食事の栄養素の偏りを防ぐこともできるのではないかと考えました。

観光客向けのお店を作るよりも、地元の人が愛してやまない店を作る方が良いというお話が印象に残りました。確かに、観光客に来てもらうことで地域外からお金を得ようとするのは、地域事業を行う上で大切な考え方であると思います。しかし、それに目をむけるあまりその地域ならではの様子が失われてしまえば、地域の良さを知ってもらうことは出来ないし、何より観光に来たいと思ってもらえなくなるというお話にとっても納得させられました。このことから、先の目標だけを見て、そもそもの前提を見失わないようにすることの大切さを学びました。

また、少数派が街を変えるというお話が印象に残りました。私の所属する実習で携わせていただいているボン・ジョーノのまちではコミュニティ部に所属する住民リーダーさんらによってまちの運営が行われています。ボン・ジョーノを盛り上げようという気持ちが人一倍強い方々が集まって、少数精鋭で運営を行っているからこそ、新しいまちとして成長してきているのかもしれないと考えました。加えて、少数派のお話の中でも、少数派を大切にしてみることでファンを増やす、というのも印象に残りました。これも実習での話になるのですが、各媒体で学生がイベントを企画する際に、4～5世帯の参加を目標にした少人数向けの企画が何度かありました。アイデアに溢れた楽しそうな企画だったため、もっと多くの人を対象に行ったら良いのではないかと考えていたのですが、加藤さんの言葉の「8割の興味ない人に目をむけるより、2割のファンに目をむける。ファンはファンを増やす。」というものを聞いて、考えが180度変わりました。少ない対象に良好なサービスを提供し、充実した気持ちで帰ってもらうことで、口コミが広がり、少しでも興味を持ってくれた住民さんの参加を促せる。省エネでプラスのサイクルが作れることを学びました。

ここで、加藤さんが「少数」を何人くらいまでと考えているのかを知りたいです。私は6人くらいまでは少数だと捉えていました。しかし、6人班での活動を行っているFM実習では意見がまとまらない事が多々あります。もちろん、他の要因があって上手くまとまっていないのかもしれないのですが、加藤さんの「少数」の考え方を少しでも参考に出来たらと思います。お忙しいところ、ご講義いただきありがとうございました。

新しいことにチャレンジする大切さや地域のために動くことの大切さを加藤さんのお話を聞いてものすごく感じた。「人口2000人弱の町をどうやって活性化させるのか。」←問題点。「四世紀前だからこそその社会的インパクトを求めて町屋をリノベーションしてイタリア料理店をしよう!!」←解決策。なぜこのような解決策を思いついたかと言ったら、地元の人たちが愛してやまない地元の人たちにすごく愛されるお店を作るべきだと感じたから。多数ではなく、少数に目を向けてみる。個々のエリアの個性が活きる時代だからこそ、人口減少がとかなってないで人口減少時代を楽しく生きる法則を見つけるべし。自分たちの暮らしを豊かにし、その上で周りの生活を支え豊かにする。そうすることで、素晴らしいサービスと商品が提供される。昭和町駅近くのパンが美味しそう。今見えているものを未来に変換できるようになる。一般大衆の中に未来はないから少数の少数派でまちを変える。ゴール設定はあくまでみんなのために。

今回の講義では「みんなの意見ではなく、課題からまちづくりをしていない人、身銭を切ってまちづくりを楽しんでいる人の意見を聞く。」という言葉に衝撃を受けた。私は地元が大好きで、このまちに何か貢献できないか、自分の強みとこのまちの課題をリンクさせて改善できないかという思考ばかりにとらわれて、地域の悪い部分ばかり見ていたように思う。地元が大好きなのに、まちを楽しんでいない大多数と同じ思考になっていたことがショックだった。加藤さんがおっしゃられた「ファンがファンを増やす」という言葉にとっても共感したため、地元のトップファンとして、これから面白いまちづくりを考えていきたいと強く思う。

さびている地域に足りないものは「新しいチャレンジ」という言葉が印象に残りました。私の地元がさびている地域に属するので新しいチャレンジが必要であると痛感しました。現代では中心がいいという思考になっているのでその思考をそれぞれの地域のもっている魅力を引き出す行動を起こすチャレンジをするべきだと思いました。また、物事を決めるときは大多数がすべてを決めると決めつけていたが、少数派がまちを変えるという意見に衝撃を受けました。少なくともいいから、少しの違った切り口でのクリエイティブな発想が思わぬ方向にむかうと思ったので、これからは多様な切り口から物事をみて周りに囚われずになにかを変えられたらいいと思いました。

今回の講義で、加藤さんにお話をさせていただいて、みんな(大多数)の意見を取り入れることが最適とは限らないという内容が特に印象的でした。これまで、他の地域創生論などの講義でも参加してもらう人全員を満足させることは難しいから、全員の要望を聞こうとしなくても良いということは学んだけれど、逆に大多数の意見を聞かないという考え方は新たな視点でとても新鮮に感じました。このお言葉を聞いてから自分にとっての「普通」は全然、普通でもなんでもないので気付かされました。これから活動していく時、さらに社会に出てからも当たり前を一度は疑って、お膳立てされた状況に満足しないということを意識していこうと思います。

また、人間関係が良好な人が幸せと感じ、ご近所さんとの良好な人間関係の構築がその基礎であるというお話にとっても共感しました。私は、鹿児島県からこの4月に北九州市に引っ越してきていて、北九州市に来てから約3ヶ月経ちました。私の実家のご近所さんはあたたかい方ばかりで、よく一緒に散歩をしたり、大学受験のときにも進路相談にのってくれたりしました。今、改めて振り返ってみるとご近所さんととても良好な人間関係を築けていたのだと感じます。しかし、現在は大学周辺に私が住んでいて、学生マンション街ということもあり、地域の方々(実習等で関わる方を除く)と交流したり、話す機会がこれまで一度も無

いなと思いました。私は FM 実習で霧丘地区に通わせていただいているのですが、この霧丘地区の住民さんは驚くほど迎え入れてくれる様な雰囲気です。約 2 ヶ月しか通っていないし、毎日市民センターにいるわけではないのに、「一人暮らし大変だろうから講座で余ったご飯あげるよ」と言っていただいたり、「娘みたいに話せて楽しい」と言って色々な相談にのってくださったりして、私自身は正直、家にいる時よりも市民センターにいる時の方が楽しいし、落ち着くと感じるようになりました。ご近所さんではないですが、地域の方々との良好な人間関係を築くことで「幸せ」に感じるということを最近改めて実感しました。

そして、みんなのためは誰のためにもならないということはこれまでも何度も片岡先生がおっしゃっていたことだから非常に重要なことなのだと思ったし、戦略として「このまちを好きな人に絞り込む」というのはコミュニティスポーツ論で山本先生も、イベントの対象を決める時には無理にそのものに興味が無い人を呼ぶのではなく、そのものに興味があったり好きだったりする人をターゲットとして考える方が良くとおっしゃっていたことと考え方が類似していると感じました。

今回の講義ではこれまでの自分の中にある視点が本当に多くあり、自分自身の視野を広げることに繋がったと思います。お忙しいなか、ありがとうございました。